

ブログネタ：エリート悪魔と下っぱ天使、友達になるならどっち？

モンゴルは、市場経済化してからもうすぐ20年がたちます。1996年に一度民主化勢力が政権をとったのですが、その時の政策が今日のモンゴル国につながる迷走の始まりだった気がします。

21世紀になったモンゴル国は、すっかり拝金主義、成金の政治家や官僚だらけになっちゃっています。

社会主義時代から市場経済制度への移行によって、思想も価値観もビジネスのやり方も180° 転換しちゃったところで、人々の身の振り方はいろいろでした。

1：一生懸命やってたのに、いったいなんだったんだよー！と転落していく人。

工場の偉い人だったり、エンジニアだった人が突然、工場が操業停止で失業し、一分野のみに秀でて、しかも割と偉い人で人に使われることになれてなくて、昔の栄光が忘れられなくて、、、夢の世界で生きるためにお酒に溺れていったタイプ。

2：遊牧民に戻って、数少ない家畜をがんがん増やして地道に成功していったタイプ。

3：遊牧民に戻ったけれど、家畜の飼い方が未熟だったところに、大寒波や旱魃が続いて、家畜が壊滅状態になり、ホームレス。都会に逆転チャンス求めて流民化。

4：ニッチな商売や行商などでなりふり構わず、金になることならなんでもやるぜ、とお金を貯めて、それをどんどん転用してビジネスマンに成長。

5：外国人や権力者に取り入って、パトロンゲット。

6：外国に留学して、パトロンや協力者をゲットして、しばらく日本の大手企業で働いて一財産を築いて、故郷に錦を飾り、起業。コネがあるから、がんがん成長。

7：政治家になる。

などなど、人生、いろいろです。

お金のために出稼ぎ行って、一生懸命仕送りしてたのに、心が離れて、やっと故郷に帰ってきたときには、仕送りしていたお金はぜーんぶ奥さんが使っちゃってて、しかも、奥さんは他の男とデキちゃって、捨てられる。お金も妻も子供も残らず、、、俺って一体みたいな絶望感でやけっぱちになる人も続出。

なんてケースは、たとえ、その男がどれだけロクデナシだとしても、責められない。かわいそすぎ。

さてさて、、、

本題は、エリート悪魔と下っぱ天使、友達になるなら？ってことでした。

モンゴルにいと、よくわかります。

モンゴル人の友情って露骨に、「こいつは使える。友達になろう」というプリンシパルがあります。

あまり利用価値のない人は友達も少ない。

外国人だと、なんとなくいろいろ見えそうだから、とりあえず友達になっとう、という感じでしょう。それが意図的か、無意識かは別として、彼らの原則はそういう思考回路。

逆にこういう回路がない人は、ずーっと底辺でくすぶって、肩を寄せ合っています。

金銭に優先価値をおかないですむ生活の場合は、それでもいいけれど、都会の生活で、損得勘定ができないのは致命的です。

誰に取り入るか、誰を騙すか、誰と仲良くしていると助けてもらえるか。

モンゴル人の本能的な人選術はたいしたものですよ。

なので、仕事を一緒にやるというならば、条件がちがちに固めた契約書を結んだ上で、保障がとれる状況である場合にかぎって、エリート悪魔みたいにずる賢い能力の高い人を選びます。あくまで、短期間、期間限定です。どこで食い殺されるかわからないから。その見極めが肝心。自分がある程度、満足いく成果をあげられたところで、いったん、さっと引き上げる。これが外国人が儲けを守るための手段だと思うけれど、法律的にも難しかったりしますね。あらゆる角度から考えても、外国人は法的に保護されたり、優遇されたりしていないし、あくまでも搾取される対象であり、お金や技術や、何かモンゴル人にとって価値が高いものを惜しみなくもたらす人は、政府高官や国会議員や大企業の経営幹部とか地元名士などが仲良くなってくれるけれど、結局、それは「惜しみなくものを提供する「みつぐ」君は大切にしなくっちゃって意味合い、強いことも自覚しておいたほうが良いと思います。

短期間、延べ日数にしても1年以内、5年以内、10年以内だったら、まったく無償で「お友達づきあい」かもしれないけれど、モンゴル人はその先、20年後、自分がその人によって、得をすることを散弾しています。できなかつたときは、、、略。どこかで牙を剥かれてびっくりするか、ちみちみ、少しずつ搾取、寄生虫のように宿主が気づかない程度の犠牲で吸い取られていくかでしょうね。

それでも、まあ、愛すべき人たちだと思うけれど。

下っ端天使といいますが、モンゴルでは下っ端は多いけれど、天使は、生まれたての子供か教育や人間社会の文明の一部になっていない子供ぐらいでしょう。

天使で居続けるのは大変です。悪気を持たず、人を騙さず、正直いっぼんやりで、たとえ、どれだけ周りで不正が行われても自分がその犠牲にもそれに加担もしないでいくなつてことは、子供であっても、モンゴルでは世渡りできないんじゃないかしらん。

天使はモンゴルでは役に立たない気がします。

自分の心は、そのただしさに導かれていきたいと思うけれど、でも、だからといって、全部を鵜呑みにして実行しようにも、この国はあまりにもただれすぎていて、にっちもさっちもいなくなつてしまう。

心の良心感覚器官をオフにしておかなければ、麻痺させて、目をつぶっていないければ、この国で生きることは難しい。

不正を全くしないで、ビジネスをすれば、3年で事業が資金繰りで行き詰まつてしまう財務制度です。

モンゴル人を儲けさせることになつても、自分がそこそこの儲けで満足して、一人勝ちして抜けるつてことができない、なんだかズブズブのマネーゲームみたいですよ。

自分が大損してても、ま、いつかつて自分なりのやり方で生活費を確保し、コツコツ、ちみちみと財産を築き、自分の持っているものを切り売りしている分には、いくらでもこの国で生きられます。

でも、清貧を説くはずのキリスト教の教会でさえ、礼拝にいけば、毎週のように時間を割いてされる説教は「レビ記」の「10%の献金」のことばかり。神様はお金を望んでいないけれど、神様に使っている教会幹部はお金を欲している。この矛盾は気持ち悪くつて、聖書は読むけれど、ここ数週間は教会に行つてません。

そういう意味でも下っ端天使は、なんだか私にぶら下がり、正義や神様の教えやお導きといったものをかざして、やっとのことで手元に残した財産を元手に、勇気を振り絞ってがんばろうとしている私におぶさりかかってくる気がして怖い。

もし、今、そんな風に、私に彼らが助けを求めてきても、私は困ってしまう。

自分は正直で、エリート悪魔みたいにあなたを騙したりしない、といっても、助けてくれていわれても、結局、私は悪魔でも天使でも、そんな人たちを引きずって生きるには、もうヘトヘトです。

やっとのことで、聖霊を受け入れ楽になって、いろんな世の中の出来事を目を開いてみるができるようになって、神様の声に導かれて生き、再び歩み始めたばかりなのに、モンゴルにいる下っ端天使は私には、ほんとに申し訳ないけれど、背負いきれません。

エリート悪魔もいらない。もう二度と、儲かるからって言葉に誘われて一緒にビジネスやって、身ぐるみはがされる、なんて屈辱も、その後の恐怖も必要ない。

私はやっど、その魔の手から逃れたのだから。

執着を手放す、本来の自分を取り戻す、という意味では、悪魔との日々が自分にとって必要だったのかもしれない。迷い道を通ったおかげで、神様とともに暮らしては、絶対しないであろう経験ができ、その痛みのおかげで私はいろんなことを学び、実体験として、一生忘れない教訓を心と頭脳に刻み込みました。

そういう意味では、世の中、いろんな人がいるんだなあ、ってことを身をもって体験させてくれた、エリート悪魔たちには感謝しています。でも、彼らは友達じゃなかった。友達だと思っていたのは私だけで、最初から彼らにとって、私は単なる餌食でしかなかったのだから。

優しい言葉で、献身的な態度で、いろんなことをサポートしてくれました。

自分ひとりでは成し遂げられない仕事をいくつも、私は実現することもできました。

でも、ほんとの意味で仕事をしていたのは、働いていたのは私だけで、彼らは一度も本気で私の取り組んだ仕事に参加したこともないし、骨折りもしなかった。頭がいいから、最初から辛いことはやらないのです。

モンゴルってほんとに素晴らしい人生道場です。

生きて日本に帰ることができるなら、このままずっと、自分がやりたいって思う仕事を信念のままに続けていけるなら、ほんとにありがたいことです。

長い目で見たら、悪魔も天使も友達だなんて思うべき存在じゃない。

ほんとに大切に、友達にならなきゃいけないのは、私と同じ人間という存在です。

不器用で馬鹿正直で一生懸命働いてもちっともお金持ちになれないけれど、心も汚れず、他人に不満を持たずに底辺でうごめきながら、もがいている人間たち。

モンゴルにはそういう報われない、救いきれない人たちが多いけれど、でも、教育さえも少し、誠実さが人間の将来を希望につなげる大切なアイテムだってことを認めてくれれば、もうちょっとまともな社会ができるんじゃないかなって思っています。

友達になるには、私は全然、彼らにとって利用価値のない人かもしれないけれど、下っ端天使たちを応援したいと、いつも思っています。